

unicef
基礎講座

今、約1億1千万人の子どもが小学校に行くことができていないと言われています。そのうちの3分の2が女の子です。女子教育の持つ重要性というのは、様々な面で指摘されていますが、なぜ女の子がこんなに学校に行けないのでしょうか。教育を受けたお母さんは、教育を受けたことのないお母さんと、一体何が違うのでしょうか。ユニセフは全ての子どもが男女の別なく、基礎教育を受けることができるように、どのような支援をしているのでしょうか。



ベトナムでは学校行っていない約240万人の子どものおお半が女の子
©UNICEF/CP95/4-32 VIET NAM

第12回 なぜ女の子が学校にいけないの？

貧困は、女の子が学校に行けない大きな理由の1つです。子どもを学校に行かせるために、家族は2つの負担を背負うこととなります。1つは、学校の授業料や制服の購入費、教科書や文具の購入費など、「直接的な費用」です。これは、男の子にも女の子にも、同じようにかかる費用ですが、途上国の家庭では子どもの数が多く、全員を学校に行かせることができない家庭がとても多いのです。そうすると、将来、結婚して家を出てしまう女の子よりも、家族を支えてくれるであろう男の子を学校に行かせる確率が高くなってしまいます。もう1つの大きな理由に「間接的な費用」の問題があります。女の子は男の子と比べて、水運びや妹・弟の面倒をみたり、炊事や農業の仕事に取られる時間が多いのです。また家族も、このような仕事をしてくれる人がいないと、誰か他の人を雇わなければいけなくなってしまいますが、そのような経済的な余裕のある家庭は多くありません。女の子が学校に行ける時間・チャンスというのは、とても限られています。

学校の状況も決して、女の子にとって整ったものではありません。トイレのない学校がたくさんあります。また、家から学校まで遠く、しばしば危険な区域を通らなければならないこともあります。学校では、女性の先生の数が圧倒的に不足していて、教師や他の男子生徒から嫌がらせを受けることもあるため、学校に行かせることを親が躊躇することも多いのです。

このような経済的・物理的な様々な理由が、女の子の教育を受けるチャンスを限られたものにしてありますが、最も難しくしているのは、「女の子は学校に行かなくてもいい」という社会的・文化的な地域や親に根ざす考え方です。小学校に入学することのできた女の子の大半が数年で学校を辞めてしまい、男女の就学率の格差は、学



©UNICEF/BENIN 1993-05/WCARO/PIROZZI



セネガルの女性の識字率は18%
©UNICEF/Z08 SENEGAL-07 PIROZZI

年が上がるほど広がっていきます。低い年齢で結婚する慣習が、女の子が教育を受け続けることを難しくし、目標となる女性の学校の先生や医者が少ないため、女の子の将来の可能性を狭めています。女の子の教育への差別を地域や親の意識レベルから変えていかない限りは、経済的な状況がある程度改善しても、女の子は学校に行けないという慣習が社会に残ってしまう恐れがあります。

女の子も男の子と同じように、教育を受け、字の読み書きや計算の仕方を覚えることで自信を持つことに繋がり、将来の選択の幅も広がっていきます。ユニセフを含め、いろいろな機関が女子教育の世代を超えた効果について認めています。字を読むことができるとより多くの情報を得ることができ、教育を通して「考え」「判断」する手段を学ぶことができます。教育を受けた女性の家族は、子どもの数が少なく、子どもが健康で、教育を受けなかった女性の子どもよりも、教育を受ける可能性が高まるということが分かっています。女子教育を充実させることは、社会全体への世代を超えたメリットになるのです。

- ・母親が教育を受けているほど、乳幼児の死亡率が低下する。
- ・教育を受けた母親の子どもは栄養状態がよく、病気にかかりにくい。
- ・女性は長く教育を受けると結婚年齢が高く、子どもの数が少なくなる。
- ・教育を受けた女性は、妊娠出産が原因で死亡する危険が低い。
- ・女性は教育を受けているほど機会や生活の選択の幅が広がり、家族や社会の状況によって抑圧されたり、搾取されることが少なくなる。

「1999年 世界子供白書：教育」より

ユニセフは教育が女子に役立つことを認識してもらう活動をしています。女性の教員の数を増やしたり、ジェンダーに配慮した適切なカリキュラムを作成したりしています。学校を安全で、便利な場所に建てたり、男女別のトイレを設ける活動の他にも、子どもにとって最初の「先生」である親を様々な視点から支援したりしています。